

パリは放射線状の街

パリの住所を探し当てるのはじつに容易である。ラ・セーヌを起点として、遠ざかっていくほどに番地が増える。そして奇数が左、偶数が右となっている。古い建物も新しい建物も、建物に番地が割り当てられているので、建築時にその建物の玄関上に番号が刻まれている。これがパリの街づくりの原則である。

散策を楽しみながら、次の角を右に曲がって、その次の角を右に曲がり、さらにもう一回右折すれば、もとの大通り沿いに出るはずだ、と勝手に頭の中で地図を描いてみる。ところがこれはパリでは通用しない。とんでもないところに出てしまうのだ。なぜそうなのか、それはパリの古くからのことなのか、ぼくの散策に、もう一つの歴史的興味が付け加わる。

フランス入りして比較的新しく買った書物は『Un Atlas Parisien』（パリ地図帳）である。各種出版物におさめられたパリの地図を収録したもので、一番古いのは1250年のものである。掛け図のように、城・館、それらを結ぶ一本の路、そしてラ・セーヌ（セーヌ川）が描かれているだけの地図から始まる。農夫等、民衆の生活の姿をどこにも認めることができない。まさに、「村づくり」「町づくり」「国づくり」で言う「つくり」手の発想そのものが描かれたものだ。地図がなぜ必要だったのか、これを見るとたちまち分かってしまう。ぼくの興味はさらに広がっていく。誰が、何のために、街をつくっていくのか、という興味である。共同体は生活者の住むところで生活の論理でつくられていく、地図とはそれを平面上に書き表したものだ、という認識など、たちまちの内に消し飛ばされてしまう。

じゃあ、頭の中で勝手に描いた地図通りに一向にたどり着かないのも、「誰が、何のために」のせいなのか？現代のパリも、そういった歴史遺産を引きずっているというのか？一人問答をしながらページを繰っていくと、突然、パリの地図の様相が変わる。一部の区画整理ではなく、ほぼ全面的に区画整理される予定の印が入っている地図に出会った。ナポレオンⅢ世期のさまざまなパリ改原地図、工事計画地図である。そして、工事完了時の地図は、今日のそれとほぼ一致しているのである。それは、オスマン計画によるパリ改造と呼ばれている。フランス革命が18世紀末に成功したのは民衆蜂起に対して有効な軍事的手段を打つことができなかった、その後、たびたび民衆が立ち上がり革命を起こしているが、民衆の闘争方法より政府の軍事の近代化が進んだことによって革命を一時的なものに止めては来たものの、ナポレオンⅢ世は、民衆が近代的闘争方法を獲得すれば軍隊では民衆エ

エネルギーを押さえ込むことができないと考え、パリ市の大改造を実施したのである。

ナポレオンの国家支配の欲求は、大改造に伴う財政支出、晋仏戦争による財政圧迫等と呼ばれ、実ることはないばかりか、退帝を余儀なくされてしまう。1870年末から翌年にかけて、民衆の激しい怒りのエネルギーを呼び覚まし、フランス各地にラ・コミュヌ (la commune 自治市) 闘争を惹起させるものになる。とくにラ・コミュヌ・ドゥ・パリ (パリ自治市。いわゆる「パリ・コミューン」という政治闘争史の意味もある) ではおびただしい血を流すという史実を生み出した。民衆は石畳の石をはがし、バリケードを作って、軍隊の攻勢を長時間しのいだ。しかし、近代化された軍隊は民衆の闘争方法をうち破る。逃げる民衆の先に待ち受けているのは、まさに袋小路に追い込むように設計された放射線状の起点、大広場なのであった。そこを逃げおおせたところで、さらにその先にはまたまた放射線と大広間が待ち受けている…。ナポレオンは財政に敗れたが、街づくりで、軍隊が民衆エネルギーを制圧するという方法においては、完全に勝利したわけである。

凱旋門から放射線状に広がる道路。そしてまた、市内の主要なところにもまた放射線状道路、そしてまた小さな放射線……。それらが組み合わされてできあがったパリ市街。それは、政治的権力が国内的秩序をいかに保つかという近代社会を象徴するものである。ぼくのような一介の生活者が脳裏に描く地図など、一向に役に立たないわけである。



大改造前 (1850年) のパリ地図 (川口幸宏蔵)